

生ごみを捨てない暮らし ー減量の流儀ー



市ホームページ

本市は、ごみの減量を促進し、環境保全につなげるため、生ごみ処理容器等購入費補助金を交付しています。申請方法等、詳しくは市ホームページをご覧ください。

補助金額

電動・手動式
生ごみ処理機

購入額の2分の1
(上限2万円)

生ごみ処理容器
(コンポスト)

購入額の2分の1
(上限2,700円)

※補助金がなくなり次第終了

野菜を育てる
堆肥を回収する
など

食べる

循環型の
ライフスタイル

コンポストに
入れて
堆肥を作る

生ごみが出る

補助金を活用して生ごみ処理機を購入されたAさんにインタビュー!



3人家族の大黒柱/Aさん
日常的にごみの排出を減らそ
うと試行錯誤している。自宅で
家庭菜園を営んでいる。

ー購入して良かったと思ったことは何ですか?

Aさん:私は3年程前に購入したのですが、購入する前
はもやせるごみの袋にそのまま生ごみを入れて
いたため、頻繁にカラスにイタズラされてい
ました。しかし、生ごみ処理機で生ごみを乾燥さ
せることで、臭いがしなくなり、ごみ袋へのカ
ラスのイタズラがなくなりました。



ー環境だけでなく、まちの美化にもつながります
ね!ところで、Aさんは家庭菜園もされていると伺
いましたが、肥料は何を使われているのですか?

Aさん:一般的な市販の肥料も使用していますが、生ご
み処理で乾燥させたものを使用しています。土
が良く肥えるのか、太いミミズをよく見かけま
す。昨年の夏にはキュウリやミニトマト等が沢
山採れ、食卓を彩ることができました。



生ごみ処理機で乾燥させた生
ごみ

ー最後にAさんにとって
「生ごみを捨てない暮らし」とは?

Aさん:日々の生活の中で「環境について考えてみて」
と言われても難しいと思います。でも一人一人
の意識が変われば、大きな変化になるのではな
いかと思います。補助金を利用して、一緒に生
ごみを減らしていきましょう!



肥料として、生ごみを活用

問い合わせ 循環社会推進課 資源循環係 TEL:26-3216



ま ち の 話 題

日本伝統織物を 未来へつなぐ

2月6日、経済産業省令和6年度ユニコーン創出支援事業「ビジネスプラン発表会REDDYKYUSHUへのファイナル出場の報告のため、市内にある(有)松田衣料店の内徳直美さんが、大塚市長を表敬訪問しました。今回、発表会に出品されたサコッシュ「MOTTEE」は、今までに仕入れた絹織物300反を材料に制作され、その質感の高さを評価されました。

内徳さんは、「日本の伝統文化である絹織物を未来につないでいけるように、今後新しいことにチャレンジしていきたい」と語りました。大塚市長は、「伝統文化を新しい形に昇華させてつないでいく発想がとても素晴らしい。世代を問わず、愛される伝統文化になるよう、今後も頑張ってください」とエールを送りました。



ANAホールディングス 株式会社との フレンドリータウン協定

2月19日(水)、本市とANAホールディングス株式会社は、スポーツや旅を通じた地域振興を実現するためのフレンドリータウンに関する協定を締結しました。この協定は、地域の活性化や青少年の健全育成、福祉の増進、子育て支援を目的としたものです。

大塚市長は、「市は、ごも達の未来を拓くという教育大綱をもとに事業に取り組んでいる。ごも達の未来やスポーツ振興等、力を貸していただきたい」と語りました。

同社執行役員の津田佳明さんは、「我々は、社員としても働く第線のアスリートを、指導を求めている地域等に送り出す事業を展開し始めるばかり。事業の起点となるタイミングで一緒にやっていけることが嬉しい。今後も地域貢献に取り組んでいきたい」と語りました。



ふくおか6次化商品 セレクションで最高賞

3月5日、CHICHIYA(津田町)の野崎幸子さんが、2月15日に開催された「ふくおか6次化商品セレクション」にて県知事賞を受賞したことを報告するため、市長を表敬訪問しました。受賞した商品は「3種のふくのごジェラート」。本来ジェラートの主成分となる牛乳を使用せず、米粉用米「ふくのこと」市内で生産されるイチゴ等の農産物を主な原材料として作られており、その独自性の高さや地域内の農業者と連携した取組が高い評価を受けました。代表の野崎さんは「アレルギーがある人でも安心して食べることができ、美味しさを共有できるジェラートを、直方から全国に届けたい」と意気込みを語りました。



将来は大工さん？ 出張ごも大工

3月5日、新入幼稚園で本市SDGs推進パートナーに登録する大英産業主催の「出張ごも大工」が開催されました。

「大工体験を通してごも達の未来の可能性の幅を広げること」を目的としており、市内では今回で3園目の開催となりました。

子どもたちは、黄色のヘルメットをかぶり、工具を使ってイスやフォトフレーム作りに挑戦。最後には、パートナー企業からの協賛を元に作製された「サステナハウス」(屋外遊具)が寄贈され、子どもたちは大喜びでした。参加した那須千昭さんは「楽しかった！また作りたい」と話し、大英産業の北野真理奈さんは「できた！の成功体験を積み、これからいろいろな挑戦をしてほしい」と語りました。

